

■儀礼を新しい文脈に移し替える——グアテマラにおける近代化とマヤ運動に関する考察

【目次】 *****

- a. 序論
- b. マヤ儀礼のシャーマン＝プリースト
- c. 近代化とマヤ運動
- d. 考察——実践行為から社会想像の可能性へ

a. 序論

共同体に存在していたマヤの伝統的なshaman-pristの儀礼が、現代マヤ人のコスモロジーあるいは文化として解釈されてゆく社会的文脈の検討を通して、実践行為が異なった社会的行為として認知され受容されることが、人々が想像する社会そのものを変容させてゆく可能性があることを検証する。

——先行研究（理論）の検討

ブロック：儀礼の意味付けと実践の長期的変化

田辺：近代化における儀礼の権力表象と実践内容の変容

ブルデュ：資本主義を具現する／しない実践行為の分析

——先行研究（実証）の検討

ケイ・ワレン：（イ）近代化の中で国家に従属する先住民像のそのメカニズム；

（ロ）マヤ先住民運動の分析

フィッシャー編：マヤ運動の多面的展開

キャロル・スミス編：国家と経済行動、市場システム

b. マヤ儀礼のシャーマン＝プリースト

伝統的なシャーマン＝プリーストの儀礼についての分析（B・テッドロックの資料に依拠する）と科研の調査で知りえたシャーマン＝プリーストの現状、あるいは共同体あるいは親族の儀礼が、コスモロジーあるいは文化としてとして再定義されてゆく過程についての叙述（フィールドノート：マヤ運動の文献、カヒブ・ノホやA T Iの実践など）

——分析のスキーマや映像資料（スライド）などは、個別の実践行為の具体例（身体所作などの検討）として提示する。

c. 近代化とマヤ運動

儀礼が政治的社会変動の中で変容してゆくことはよく知られている（例：千年王国運動）。そのような変動は、被抑圧者の政治運動の表象行為（コーン、ランテルナーリ、J・コマロフ——彼女には医療人類学論文もあるので要チェック）やマダガスカル死者崇拜儀礼のように社会的経済変動が儀礼実践の内容に深く係わることをしてきた



(ブロック)。しかし、そのおうなドラスティックな変化以外に、儀礼の内容が衰退を遂げずに個人化として特化したり（福島のスантиアソック）、グローバルゼーションの中で儀礼の権力表象が変化する（田辺の可能態論文）ようなマイルドな変化あるいは行為実践の微小観察においても把握可能な事態も数多くみられるはずである。

このようなドラスティック／マイルドな変化を捉える分析枠組みとして、ここでは近代化（モデルニゼーション）の中での社会運動論（塩原の議論を参照のこと）として試みよう。

――モデルニゼーションの議論

ガルシア・カンクリーニの2著作「ハイブリッド文化」「モダイニティの変容」

ラビノーの「フレンチ・モダン」

西アフリカあるいは東アフリカの呪医集団の近代化あるいは国家枠組みへの吸収と呪医の適応過程（該当の書物の他に、近藤さん）

――Movimiento Maya（マヤ運動）の議論

太田論文その他の議論

Memory - 共同起行

d. 考察――実践行為から社会想像の可能性へ

社会運動の微細な観察から、社会変動全体への以降を、実践を媒介概念としてどのようにつなげてゆくのか？

高木光太郎のLPPの補完的発展可能性を説いた最新論文を参照のこと。

社会的実践行為の体系についての考察を試みた諸理論家あるいは民族誌家は、このような観点からどのように考察されうるのだろうか？（パーソンズ、ルーマン、ギアツ、リーチ、ブルデュ、ブロック）

このような議論は、煎じ詰めるとデュルケーム的伝統とウェーバー的伝統をどのような形で調整しようかと考えた様々な諸理論家の議論と、どのような形ですり合わせることが可能なのか？

ヘレニズム的概念であった可能態の議論を実践行為が生み出すものとして期待した田辺の議論と、ネオマルクス主義的实践を説いたラクハウの議論を先鋭化させ対立させ、マヤ運動のシャーマン＝プリーストの实践とその社会的受容性が、それらの二項の対立の中でどのような位置に占めるかを示唆する。

■用語法

- ・主体 subject
- ・エージェント agent
- ・エージェンシー agency（作用、媒介）
- ・実践 practice
- ・実践コミュニティ community of practice
- ・正統的周辺参加 legitimated peripheral participation

参加 participation
ハビトゥス habitus
無知の元 docta ignorantia
正統的周辺参加 legitimated peripheral participation
disposition